



Igroup

communication

Special 01

一人ひとりの一隅を
照らし続ける。



【特集】

自立援助ホームで
活躍する社員

NPO法人 アイグループ

〒816-0848 福岡県春日市白水池2丁目14
TEL:092-710-0013

www.npo-aig.jp



子どもたちが他人に頼り、生きることがあたりまえになることを願い支援しています。

Profile

私と同じような障がいをかかえて育つ子どもたちの支援に関われることを使命に感じて、関わるすべての子どもたちに対して、職員の皆様と心豊かになれる居場所を提供していきます。

理事長

國分 健作

NPO法人アイグループ

理事長

祖父以外の家族は嫌いだっただ幼少期。特別支援学校の見学で『自分も同じような子どもなのだ』と認識した。

福岡市中央区済生会病院で生まれ、3歳～14歳まで通院。毎日服薬していた為、幼少期の記憶は印象的なことしか覚えていません。毎日薬を飲んでいることに母親が「気持ちは分かるよ」と言われていたことに、「俺の気持ちが分かるわけがない」という子で、祖父以外の家族は嫌いでした。小学生の時は、食事も摂らず、テストも0点ばかり、いじめや恐喝を数年受け続けて、小学6年生の時に遺書を書いて、小学校の屋上に行ったことを覚えています。しかし高所恐怖症だったことから、思いとどまり、いじめていた子へやり返す。翌日、初めてクラスの子が話しかけてくれて友達と思える子ができたことを覚えています。中学に進学し、進学は進路になく、中学卒業後は働くことしか選択肢がないと言い聞かせて仕事を探していました。

母親は進学させたいと考えていたようで、特別支援学校の見学に行ったことも覚えています。なぜ、覚えているかという、そこにいた子が印象的な子ばかりで、飛び跳ねて走り回ったり、奇声をあげて叫んでいたりと、自分も同じような子どもなのだ認識したからです。いとこや同級生とは違うんだということは理解しました。また、いとこが3人児童養護施設に入居していて、うちで家族が引き取り生活することに。この頃は、不良グループと言われる子たちと喧嘩して、職員室へ呼び出されていました。喧嘩の理由は、いじめられている子を知ったら、そのいじめていた子にやり返す。小学生から空手を習っていた為、正義感の強い意志をもって、行動していました。気づいた時は、一匹狼と言われて誰も寄り付かなくなり、他校と喧嘩をする時だけ、声をかけられる存在になっていました。たまり場と言われる場所に行き、単車に乗って、小学校とは真逆の生活をしていました。仕事しかないと思っていたのに、親戚の叔父さんが自衛官の為、自衛官を受けるように勧められ受験しましたが、落ち。土木や土方の仕事をする為に、地元にあった足場の会社に面接にいきました。そんな時に、祖父が他界。皆さん信じないかと思いますが、その日を境に病気の症状が無くなったことが分かりました。いつも、ぼんやりとくすんでいた頭の中の雲が、霧が晴れるかのようにクリアになったのです。私は、祖父が病気を持って行ってくれたのだと思っています。その後、記憶することの喜びや、分かることが新鮮で、とにかく辞書や教科書を読んだ。頭の中にページをコピーしていく感覚で、覚えられることに楽しさを感じて14歳から人生が始まった感覚でした。当時名前しか書かずにすべて0点の偏差値28から、偏差値60代(英語72)まで経験しました。周囲の見方が変わる感覚も体験することができました。諦めていた進学も望めるようになったのですが、すでに働きたい想いで生活してきた為、就職を選ぼうとしました。しかし、父親が中卒で高校に行けるなら行って欲しいと言われ、近くの高校を受験し、進学することになった。高校では、テストの成績やクラスや学年内の順位が上がるごとに、お金をもらえるような交渉をして、お小遣いを稼いでいました。その結果、大学の特別推薦枠に入ったのですが、仕事をしたく調理師の専門学校や美容師の専門学校に行きたく、専門学校を選ぼうとするが、高校の先生と家族の説得もあり、大学に進むことになり、大学生活を始める。

大学生活を始めて、バイトを始め念願の仕事ができるようになる。1年生は学校をメインに生活し、卒業に必要な120単位のうち60単位を獲得でき、2年生は一度も学校に行かず、バイトを6件掛け持ちして、個人事業主として活動も始める。その仕事で、大学教授の息子から損害賠償を求められて600万の借金をする。3年生は、最低必要な単位をとりながら、返済の為にバイトをする。4年生で、何とか卒業でき、仕事も内定7社獲得するが、借金を返す為に一番稼げそうな、歩合制の営業職へ入職する。その後3年で借金返済を行い、営業職に疲れ、介護の営業職募集に応募して、福祉の分野に関わり始める。その会社が、世界で5番目のアウトソーシング会社で、年商5,000億、グループ会社430社の会社だということを知り、一代で築き上げた社長に興味を持ち、本社に移動してノウハウを学ぶ。その後、グループ会社内の新会社の社長就任し、3年後に年商200億の事業部に成長する一役を担う。始めの結婚もこの頃。創業者の社長の退任意思を耳にして、私も退社し自らの会社を設立することを選ぶ。この時、取引先は1件も持ち出さず1から始める。(資本金10万円) 独立した会社は、売上200万から400万に成長し、1年は続いたが取引先が新規事業をとりやめた影響を受けて、売上金を回収できずに休眠。その後、取引先の取締役からの仕事の誘いを受けて、社員として就職。累積赤字3,000万、単年赤字500万の介護学校の黒字転換させるミッションを受けて学校長として介護学校の経営を経験する。初めての事業の為、まずは事業の理解をする。その後は経営のノウハウは前社で学んでいた為、ロジカルに再構築案を作成して、実行していく。1年目に単年500万の黒字へV字回復させることができた後は、公共職業訓練校の認定を受ける体制を構築し、高得点の評価を得て、行政に助言を行う所まで成長する。3年で累積3,000万の赤字を解消し、5年目に専門学校の設立を目指すために、年商5,000万を達成した頃に、本社内に営業部ができ異動に。その後、法人全体の営業と新規事業の開設で障がい者事業と、保育事業、行政とのつながりを持つための政治団体の設立に携わる。しかし、オーナー兼社長が新規事業をとりやめることが分かり、離職。全国組織のFC事業の本社課長職として、西日本エリアを担当する。

NPO法人アイグループ設立へ。

この転職前に一度、福祉事業と離れた時に、現在の松田理事と出会う。松田理事は、唯一営業成績で抜けなかった人財。NPO法人アイグループ設立時に理事に就任していただき、その後監事にも就任し、現在の事業部長兼理事として活動を共にしています。NPO法人アイグループを設立したときに私が発起人でありながら代表者に就任しなかったのは、私が会社員であったことと、以前会社を休眠させている為、融資などの信用情報に弱い為、個人的には妻と結婚時に独立して事業はしないことを約束していた為。様々な思いから自らの就任は避けて、当初理事の中で会社経営者の方に、担ってもらう。当時の理事長はNPO法人でお金が借りれないことや他にも理由はあったかもしれませんが、理事長を辞任。同日、前理事長の社員が理事長に就任し、事業継続を検討するが、1カ月弱で責任を負えないと辞任。残された理事の中で、私が選任され理事長に就任。当時会社員だった私は、社長からも解雇を通知されて、金銭的に余裕もないまま、事業を始める。前職の賞与を含め、給与など集めて100万投資する。自立援助ホームえんの貸貸契約資金120万円不足については、60万森監事に借入。40万河村副理事長に借入。20万は追加投資。何とか12月に支払いを終えて、2月1日開設に向けて準備を行う。1月中旬から施設見学を含めて、相談3件あり。1名は、受け入れが確定していた。2月2日自立援助ホームえん開設。県庁から呼び出しを受けて、事業停止に近い判断を伝えられて、変更届を再申請する。受理までは、事業の受け入れは禁止とされ、3月19日まで、事業が停まる。

この間、固定費の支払いは続き、借金は300万を超え、借入先にも返済期限を延ばしてもらい、3月28日に初めて児童の受け入れを開始する。

その後、全役員へ内容証明が届く。

これに対して、弁護士に依頼して対応する。

この頃は想像を超えたできごとにより右往左往しながら、職員に対して正義感や正論で職員の主張を押さえつけようと良くない経営者でしたが、その時関わっていただいた子どもたちと職員と関係者に育ててもらいながら、私自身が変わらなければならぬと気づき、現在の価値観にたどり着きました。

関係者の中に中小企業家同友会があり、経営者の先輩の意見は、必要な指摘ばかりで、人を活かす経営の考えを学び、自らの考えが間違った方向に行かないよう助けられました。

**ひとりひとりの個性を尊重し、
認めることを大切にする施設のあり方を考えました。**

制度に依存しない経営体力を得ること。

まずは、利益を生み出せる経営体質の構築を目指します。

私が事業を始める前と変わってきた要因の一つは、自己開示。

自らの成長なくして、現在の価値観には至りませんでした。

様々な研修にも参加して、児童養護施設の理事・施設長の言葉もハッと気づかせてもらえ、初心に戻ることができました。

その中で、ヘルパースクールの同期だった大谷さんの影響も大きく、そのご縁から、福岡市のかんらん舎・結ホームの柴田副理事長・中島理事ともつながりを得ることができました。

全国自立援助ホーム協議会の総会で知り合った仲間副会長・山村代表は印象深いご縁になりました。

前者は同じ視点をもつ頼もしい先輩。後者は、勢いのある経営者。

他にも同席したテーブル内で、沖縄で事業を行いたいと話す方など、向上心を刺激する経験となりました。

その後、2泊3日の同友会での合宿に参加し、経営理念の再考を行う。

経営指針書を作成したのもこの時で、税理士先生にこれは事業として成り立たないのではと指摘を受けて、夢物語を描いた事業計画案(経営指針書)を創造することを掲げました。

夢物語とは、利用者が仕事と住まいを続ける為に、利用者のことを理解できる職場を提供すること。そのためには、同じ境遇で育った先輩がいて、共感・共存できる環境を作ること。

それを継続し続ける為に、ひとりひとりの個性を尊重し、認めることを大切にする施設のあり方を考えました。

そのためには、制度に依存しない経営体力を得ること。まずは、利益を生み出せる経営体質の構築を目指し、それには5施設の運営が必要と目標を立てました。

それを全職員に発表し、宣言を行い実現に向けて進もうとしたのですが、主力となる職員が次々に離職。

事業を継続することも難しいのではないか、色々な思いが巡りました。

不安に陥ると続くもので、消防の立ち入り調査、行政の立ち入り監査なども同時期にあり、入居者の一人が新聞に載る性被害にあってしまう出来事もありました。

その子が、家出をしているかもしれないと心配になり、見回りに行こうとする途中で、階段から転んで足を骨折。3ヶ月入院することになり、手術も2回行うケガをしました。

車いすでホームに出勤し、子どもたちにも面談しながら復帰まで職員に支えてもらいホームを継続することができました。

感謝。あたりまえの有難さ。謙虚な気持ち。無力感。不安定な毎日をすごしていました。

経営数値のバランスが崩れたのもこの頃から。

私が月に20日の夜勤と、25日の日勤を続けて事業費に費やしていたことが、3ヶ月できなくなり、退院後も数カ月は、最低必要な日数のみ勤務することしかできませんでした。

この途中、熊本の自立援助ホーム開設も進めていて、移動距離が広がり松葉杖を利用して新幹線やバスで通勤することもしていました。

その後、自立援助ホーム庵の開設。ステップハウスおん(熊本)の開設。自立援助ホームinnの開設。ステップハウスおん(長崎)の開設を行い、自立援助ホームLUCKの開設決定まで、夢物語を実現できるところまで進めることができました。

職員ひとりひとりが、支え続けていただけている結果だと感謝の想いでいっぱいです。

また、利用する児童もさまざまな悩みや課題を抱えている子どもたちが利用しています。

**私たちは、目の前に関わる子どもたちの支えになる
一人の大人として、できることを考えて行動する。**

制度が利用できない子どもたちの相談も増えていることに、ステップハウスおんも一助となっています。

私たちの取り組みは、世間一般には認知されてなく、誤解やイメージで誹謗中傷を受けることもあります。

私たちは、目の前に関わる子どもたちの支えになる一人の大人として、できることを考えて行動する。それを毎日続けて、数年後の子どもたちの成長をやりがいに感じていく役割だと思い、一日をすごしています。

この役割に携わって、子どもたちが今日も生きていることに安心する。あたりまえだと思っていた概念を大きく変わる経験をさせていただいています。

子どもたちが他人に頼り、生きることがあたりまえになることを願い支援しています。

子どもたちの自立を
家族のように支援する、
プロフェッショナルたち。



えん

かけはし

梯 紀久子

自立援助ホームえん

指導員

子どもたちが自分の個性を活かせる仕事に就く、
もしくは人生を彩る趣味を見出し、
自己実現社会への還元を果たす。

開設後間もないえんで、2人の乳幼児を
かかえ全力で勤務されている園分夫婦
の補助的夜勤スタッフとして入職。グルー
プが進化していく中、えんにおいても新し
い若いスタッフの活躍が期待されます。
創立期から次の新しい時代がくるまで、
つなぎ(かけはし)として頑張りたいと思
います。最も力を入れている点は、一人一
人に向き合い、じっくり話を聞く事。

子どもたちが自分の個性を活かせる仕事
に就く、若しくは人生を彩る趣味を見出し、
自己実現社会への還元を果たすという

事です。支援のスタートは安心安全な居
場所づくり。退去時にも自らがつかんだ安
心安全な居場所へ堂々と向かって欲しい
です。物理的な事だけでなく、心の居
場所として、職場や友人との絆の中で繕
うことなく自然体でいられる安心安全な
人間関係を築いてもらいたいです。
自分の人生を受け入れ前向きに生きて
いく姿をイメージしたいです。キーワードは
『笑顔』かなと思います。



一人一人に向き合い、
じっくり話を聞いています。

Profile

出生、田主丸町(家業は綿屋のちに寝具
製造)結婚して八女に嫁ぐ(製茶機械の
販売)。夫の病気をきっかけにヒーリング自
然療法と出会う。久留米にてリラクゼーシ
ョンルーム、レンタルルームを運営。住み込み
管理人、他様々な短期パート・アルバイトを
経て現在基山町に在住。



えん

黒瀬 慶子

自立援助ホームえん 指導員

子どもたちの心の傷が少しでもなくなることを願って、寄り添ってあげたいと思います。

最初は何も目的もなく、自立援助ホームの食事作りをお願いされのがきっかけで、入職しました。色々な事情を抱えて来た子どもたちと一緒にご飯を食べたり、話したり、笑ったり、泣いたりしながら、毎日を過ごしています。最も力を入れている点は、子どもたちにおいしい物を食べてもらえるように、料理を頑張っている事です。今の課題は、子どもたちが仕事・学校に行くようになり、本当の自立ができるようになるまで、どうやって接していけばよいかをいつも考えている事です。

子どもたちの心の傷が少しでもなくなることを願って、寄り添ってあげたいと思います。わたしが思う支援とは、自分のことは自分でできて、一般常識が分かる大人になってほしい。子どもたち一人ひとりに耳を傾け、できることがあれば手を貸してあげられればいいかなと思っています。

子どもたちにおいしい物を食べてもらえるように、料理を頑張っています。

Profile

父を早く亡くし、母子家庭で育ち早くに結婚。二人の子どもたちに恵まれ、母も主人も亡くなり今に至っています。



えん

矢立 真貴

自立援助ホームえん 指導員

色々な経験をしてきた子どもたちが安心して過ごせる快適な環境づくりに力をいれています。

色々な経験をしている子どもたちに、私にも何かできることがないかと思い入職しました。えんでは、支援員として、日中の食事・洗濯・掃除・病院への同行などを行っています。子どもたちが快適に過ごせる環境づくりに最も力を入れており、特に掃除を頑張っています。子どもたちが進路先で悩むことが多く、長く続けて働くことがなかなか難しいという現状があるため、どう声かけをすれば良いかを悩んでいます。

今後のビジョンは、全員が働き、一つの場所で継続できる力を持ってもらえるよう支援していくことです。わたしが思う支援とは、子どもを安心して送り出せるようにすることです。

全員が働き、一つの場所で継続できる力を持ってもらいたい。

Profile

就職・結婚・出産を経て、現在4歳になる子どもを子育て中です。

inn

田原 美好

自立援助ホームinn 施設長

子どもの心落ち着ける生活とここを土台に行動しようと思える居場所・存在になる。

自立援助ホームという自立を目的とした居場所で支援ができるというご縁をいただき、子どもたちの支えとなれと思い入職しました。innでは、指導員をしています。最も力を入れている点は、職員間の繋がり、ホームの雰囲気づくりです。今の課題は、発達や愛着等の気になる子ども、専門性が求められる子どもへの対応です。子どもの心落ち着ける生活とここを土台に行動しようと思える居場所・存在になりたいと思います。自立とは何か、まだ答えはわかりません。身の回りのことを自分でできるようになるだ

けではなく、対人関係や精神的な部分での経験や成長が必要だと感じる子どもがほとんどです。短期間にこれを身に付けていくことは、かなりエネルギーのいることだと思います。もっと手を貸してあげたいと思うこともあります。ですが、それは子どもの為にはなりません。ここを出た後に生きていく力を身に付ける為、それぞれが過去や現実を受け止め進んでいかなければなりません。職員として「子どもの為になるか」を常に考え、伝え続けながら一緒に経験を重ね、それぞれの自立を見つけて行けるよう支援したいです。



職員間の繋がり、ホームの雰囲気づくりに力を入れています。

Profile

長崎県の海が身近な田舎町で育ち。学生時代から唯一関心を持ち続けていることが、児童福祉分野でした。大学で児童福祉を専攻し、保育士、社会福祉士の資格を取得後は、その分野に携わってきました。

inn

溝上 紗緒里

自立援助ホームinn 指導員兼心理士

無言のメッセージにいち早く気づき、子どもの目線で話を傾聴することに力をいれています。

大学で学んだ心理学を活かした仕事に就きたいと考え、子どもの声に寄り添える存在になりたいと思い入職しました。innでは、指導員兼心理士を担当しています。最も力を入れている点は、子どもの目線に立って傾聴し、無言のメッセージにもすぐに気づけるようにしています。人との関わり方が不得意な子に、どのようにしたらよりよい人間関係が築けるかの伝え方を日々模索中です。社会に出てから、挫折や敗北感を感じる日がいつか来るかもしれない。その時に前を向いて生きていけるよう、子供たちの心を育ててあげたいと思います。

わたしが思う支援とは、心身共に健康を育み、心の育ちにおいて大切な「甘え」を供給していく事です。あなたの存在自体を大切に思っている人が、ここにいるということを忘れずに、生きる勇気を持って笑顔で施設を退居してもらいたいです。



子供たちの心を育ててあげたいと思います。

Profile

生まれも育ちも長崎市。大学卒業後、医療スタッフとして働きながら、結婚出産を経て、現在4人の子供の子育て奮闘中。



各職員がそれぞれの得意分野を生かしつつ連携し、総合的に支援をする施設を目指す。

Profile
 コンピュータ業界で営業やインストラクターの仕事に就いたのち、その経験を福祉の分野で活かしたいと障がい者福祉や熊本地震復興支援に携わってきました。

ラブ

林 和美

自立援助ホームラブ 指導員

児童が、自分に自信を持ち、職業選択の幅が広がるよう、支援しています。

子ども達が抱える不安を解消し、笑顔で過ごせる機会を増やしたい。その過程で自身も成長したいと思い入職しました。ラブでは指導員をしています。職業選択の幅が広がるよう、PCスキルや履歴書の書き方、面接マナー等の習得に最も注力しています。今の課題は、より効率的な方法を模索することです。職員が得意分野を生かしつつ連携し、総合的に支援する施設を目指す。「ラブに入って良かった」と思える施設にしたいです。ラブでの日々が子

も達の心の潤いになったり、自信に繋がれば嬉しいです。和やかに過ごせて退去後も気軽に立ち寄り相談でき、『不安<ワクワク』の思いで夢・希望を持って巣立する自立援助ホームになればと思っています。料理は苦手ですが、子どもに苦戦の様子を見せるのもいいのでは、と自分を励ましつつ、美味しい料理を提供するため日々奮闘中です。

LUCK

梶原 啓介

自立援助ホームLUCK 施設長

子どもへ自立後の生活をイメージさせること。

以前から社会的養護を必要とする子どもの支援に興味がありました。児童養護施設で勤務後、更なるキャリア形成のため当法人へ入職しました。子どもに対しては、自立へ向けて必要な情報を与えることを意識しています。時には父親のように、時には兄のように接することで良好な関係を築くことを心がけています。職員とは、前職で得た知識や経験を伝えながら一貫した自立支援ができるように常に連携を取ることを意識して関わっています。

最も注力している点は、子どもへ自立後の生活を想像させることです。子どもの社会に対する関心と適応力の低さの解決と支援が大きな課題と考えています。支援とは、自立に必要な情報を子どもへ的確に提供することだと思います。手にした情報を子ども自身が選択しながら成功や失敗を繰り返すことで、自立後に必要となる知識や技術を習得してほしいと望んでいます。



子どもの支援と並行してスタッフの資質向上の助けをしたい。

Profile
 大分県日田市出身。大分大学を卒業。大学院へ進学。大学院を退学し、福岡県内の公立小学校で常勤講師として勤務。常勤講師を退職し、児童養護施設で勤務。2020年に児童養護施設を退職し、現職で勤務。

庵

本田 陽子

自立援助ホーム庵 支援員

子どもが一人暮らしをする時の為に調理を一緒にし、何が作れるようになりたいか、何が食べたいかを一緒に考え作ります。

施設に来るまでの経緯は異なれども、子どもたちはそれぞれ不安や恐怖、孤独感を持っています。安心して生活出来る場になり、多くの笑顔が見られるよう努めています。庵では指導員補佐をしています。最も力を入れている点は、子どもが一人暮らしする時の為に調理を一緒に行うこと。何を作りたいか、何が食べたいかを一緒に考え調理します。今の課題は、子どもによって悩み・性格・考え方が違うことです。

支援の仕方や話し方をその子に合わせて変えています。皆が自分自身を理解し、社会に出ても生活できるよう支援したいです。私が思う支援とは、子ども一人一人をよく見て話し合い、思考を促し、本人が納得の上で行動出来るようにすること。その行動の結果が本人が望んだものであってもなくても、将来に活かしてほしいです。行き詰ったら、遠慮なく庵を頼ってほしいです。



子どもたちが自分自身を理解し、庵を理解し、社会に出ても穏やかに過ごしていけるように支援していきたい

Profile
 私自身も子育て中です。色々ありますが、子どもたちがいきいき育つ支援ができるように頑張っています。

自立援助ホーム LUCK

北九州市八幡西区さつき台に、定員6人(女子のみ利用可能)の自立援助ホームを開設します。



北九州市は、とても思い入れがある地域です。私たち法人の原点である自立援助ホームえんで、初めて受け入れをした児童が北九州市から利用していただき、色々な経験をさせていただき、心理士の方にもご助言いただきながら、学ばせていただくことができました。えんの開設時に理想を掲げた思いに対して、その理想は現実とかけ離れていたことも知る機会になりました。私自身の価値観を大きく変える経験をさせていただきました。北九州に施設がないことで、春日市や熊本県、長崎県へ移動して生活をする児童がいた為、北九州に施設を開設して、生まれ育った地元で生活を続けさせたいという想いで開設に至りました。これから出会う児童たちと共に成長できる施設を目指し取り組みます。

2021年3月31日開設。
 (2021年4月1日事業開始)